

司馬 遼太郎著

長安から北京へ

中国認識にかんするある種の雪崩現象が、いま、わが国に起こっている。

現代中国の政治、というより毛沢東政治とその極限形態であった文化大革命を、それらの担い手ともども、わが国といわず、ソ連、アメリカといわず、要するにダメになった人類史の救済の糧として尊んできたはずの（あるいはそのような尊びの潮流に心地よく身をまかせてき

たはずの）日本の知識人は、こて手にした私は、著者より四カ月前、文章期以来二度目の訪中（『中国農村からの報告』）に比肩し得るかどうかという期待

恥ずかしなが
ら司馬遼太郎
氏の本を初め

の訪中記（邦訳名「中国が目ざめるとき世界は震動する」）やヤン・ミュールダールのルポ

の内幕はなしについて知識も関心もない」と書いて読者を驚かし、つきはなす。やはりこの著者において、なお今日の中国

中国の「不易なるもの」

り）傍観して、江青夫人ら「四人組」への救援活動さえ起こさ

を果たしたときの印象と重ねあ

をもって読んだ。

は不可侵なのである。

うとしない。

わけて、本書を一気に読了し

著者は北京で姚文元にも会った。しかも、私はおのすと、わ

本書は、著者の廖承志氏につ

本書は、著者が昨年五月に「日本作家代表团」として訪中

が国を代表すべきこの高名な作家の筆が、同じく招待旅行者であ

マの再現において誰よりも秀でているはずの著者は、「中国に

が珠玉のようにちりばめられていて、激動の中国のなかに入不



司馬 遼太郎氏

易なるものVを見出そうとする視点鮮やかである。そして、きわめてリアルに対象を観察しながら、注意深くも賢い筆致で「標準語の世界」で書かれた本書には、著者の「ふっきれなさ」が率直に出ていて面白い。

中国の旅に疲れた著者は、今後、生身の中国について当分発言しなくなるのではなからうか。

（中央公論社・八八〇円）
東京外大助教授 中嶋 嶺雄